
Country of expressionless ~ 無表情の国 ~

壬哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C o u n t r y o f e x p r e s s i o n l e s s の国
の国

【Nコード】

N 4 6 7 3 B

【作者名】

壬哉

【あらすじ】

高校二年生になりそうな俺が、相談ばかりを聞いていて、感情さえ消えてしまえばなんて思っていたそんなある日、図書室で変な本を見つけてしまい。急に吸い込まれてしまったその場所は……？

相談

高校二年生になりそうな、一之瀬粒^{いちのせじゅう}。血液型はかなりの大雑把で悩み事が少ないと思われていたO型。誕生日は1月11日。星座は忘れた。とりあえず、今の高校には、のんびりと平和に、何事も平凡に生きています。特技は、相談を相槌を打ちながらも答えてやることです。しかもこれ。結構相手には助けられているといわれています。

もし今、知らない人に自己紹介をすれといわれたら、俺はそう綺麗に答えてやることは出来る。こんな言葉。いつ考えたのかと考えてみても、いつもこれが頭に回っていて、いつの間にかこんな言葉が出来ていた。ただそれだけだった。

しかも、良くこれを思い出すのは、友達のやつらの相談事を聞いているときだったはずだ。ということは、さいごの一文「特技」というものは、本当のことだ。

元々は、恋愛相談が多かったのにもかかわらず、友情関係についても良く話される。のが、友達だけだったら、いつでも来い！！というかんじなのだが、残念ながら、そうも上手くは行かなかった。というのもおかしい話では無いかとは思う。

たまに来る人で考えさせてもらえば、隣のクラスの、話したことも無いやつだったり、違う学年だったり。それとか、友達の従兄弟の弟で、中学三年生で、受験について困っている。という事も相談に乗せられていることもあった。

——いやいや。受験の事なら兄貴に聞けよ。

内心そんな事をチクチク言いながらも、少し困っていますのような顔をして、黙々と話くらいは聞いてやった。

相槌も打ったし、愛想笑いもした。

けれど、受験のときのことなんか忘れてるし、そんなにお前の

ことしらねえよと怒鳴りつけたかったが、話し終わった後「どうすればいいでしょうか？」なんて聞かれてみる。「知るか」なんて答えにくいじゃないか。

俺にだって感情はある。

「進むべきは自分の心だ。自分がいいと思って決めたところに余り文句を言わないようなところを選べ。回りに流されるのではなく、自分が行きたい道を探せ」

イラついてしまっていた所為か、そんなかつこいいのかかつこ悪いのか、適当なのか。そんな言葉を返してしまったではないか。それを言ったのが良かったのか悪かったのか……。

相談役として、今まで何度も受けられていた。

そしてそんな今も例外ではなく、きかされている。

大体の話は、右から左状態だから、相談している方の人とは、真剣に聞いてくれているような表情だなどと思わせるような瞳を見せるが、本当のところじつと見つめているだけで、全く持って考えなんかない。

「で………その友達がなんて思ってるか解らなくて……本人に詮索するわけにもいかないし……」

「なら無理に自分を作る必要なんかないさ。相手と少し距離をとるか、余りしつこく話を自分からかけようとしないうがい。いつも自然と隣にいる子ならば、そんな自分から話しかけなくても、向こうから少しは話しかけてくると思いますよ？」

今日の相談者は、三年生の女子からだ。

三年の事情なんて特に知らないから、どれだけ話を聞かされていて、どんな状況なのか。それで何より、進路を本気で考えなければならなくて、皆して慌てふためく状況だ。なにせ、まだ俺は高二になっていない。なりそうだということだけで、まだ二月上旬。

いつもこういう感情的な相談をされているとき。聞いたときだけ

は、本当に思うことが一つだけはつきりあるのだ。恋愛でも関係する。

——感情なんてなくなってしまえばいいのに。

笑うこともなければ、一人で居る人にとって、自分が笑われてるなんて思わなくて済む。余り一人で居ると、自分のことを笑われているのだろうかとか、いろいろ不安になってくる。

泣くことがなければ、周りの人たちだって、困る事も、どうすればいいのかとも思う必要はなくなる。泣いたら泣いたで、下手してしまえば氣遣ってくれることもなく、遠目で見つめられてしまうだけになるかもしれない。

悲しむ事がなくなれば、人を哀れみ、シユンとした気持ちにならなくてすむ。それに泣くのと一緒に、周りも氣遣おうとされてしまう。心も痛いし、回りも氣にする。

怒ることがなければ、周りを不愉快にさせることも無いし、お互い嫌な思いをしなくてもすむ。

表情を消すという事は、いつも無表情で、ただ毎日平凡で、ただ毎日が同じ生活のようなものだ。耐え切れる人も居れば、耐え切れない人も居るだろう。

そう考えると、自分には何が足りないのかと考えると、柔らかな表情がない。そう思えてしまう。

何事も、相槌や、作ったような苦笑や笑顔をもらす必要もない。

ただ本当に必要な言葉だけ交わし、後は自分の生活を、ただボンヤリと時間に身を投げてしまえば良いだけの話だ。

特に最近の話なんて、企業的に言わせて貰えば、自分たちが上に上にと、頑張ってしまうから、変に争いが起きたり、犯罪が起きたりしてしまうのだ。消費税なんて上げなくていい。上げるくらいだったら、議員の年収だかなんだかを減らせば充分では無いか。そう文句をつくひとだっている。

そんな感情さえ消えてしまえば。

そんな内閣とか、王とか、天皇とか。そんなもの作らなければ。すべての表情や、感情を投げ捨ててやれば、衝突することも無いし、争う必要もなくなってくる。最近相談を受けていて良く思うのだ。

友達同士気を使うから疲れたり、もういやだというきもちになっ
てしまう。けれど、感情がなければ、ただの表面的な付き合いでし
かなくなってしまうんだと最近思ってきた。恋愛に関してだってそ
うだ。「好き」という感情がなくなれば、「愛して」という欲求も
なければ、「愛したい」という気持ちもなくなってしまうのだ。

もし、感情のない世界に入れるものならば、今の生活をすべて捨
ててしまえる気がする。

けれど、不思議な事がおきるのは、今日の相談が終わった後だっ
た。

大体相談は、誰も来ない図書室で行われるため、相談者が出て行
った後は、図書室の本を適当に開いたり閉じたりと、無意味な時間
を過ごしていた。そして、今日もその無駄な時間が出来て、たまた
ま目に付いた本を手にとって見た。

手にとって見たその本は、凄く周りの本とはちがく、雰囲気が違
う。

肌触りは、少しざらざらしているが、目で色あせた感じも無いし、
まだ新品そのもののような感じだった。けれど、それなのに何か懐
かしくて、心がこめられているような本のような感じがする。本当
に「ような」の嵐だ。

ゆつくりとその少し太めの表紙を開いてみると、まだ新しい匂い
がやってきた。

が、新しいのはそれだけではなかった。

「はい？」

表紙をめくったそのすぐは、真っ白にしか見えなかった。が、最初はそんなものかなと思い、次のページを開いても、真っ白なまま。空白な日記と同じようなものだった。

漫画でよくこんながあるよなとか思いながらも、さすがにそこまで現実離れはしないと思って、ペラペラと好奇心という珍しいものに襲われて、次々とめくっていくと、何も書いていないはずなのに、凄く何か書かれているような気がするのだ。

何か感情があり、それを必死にこっち側に伝えようと思っていたのだ。

不思議で、表紙の名前を見たとき、その本の名前は「Count
ry of expression」。

「……カントリー……オブ？……エクスプレス……シオ……ンレス
……？」

英語の苦手な俺は、素直にあつたままの英語を読み、再び開いていたすると、真っ白だった本のなかで、急に何かを書くかのように、だんだんと黒いペンでいろいろと描かれていく。

驚きの所為で、ピタリと固まったからだ。思考も止まり、言葉すらも出てこなかった。

すべて書き終わると、次のページと勝手にめくれて閉まった。

漸く動いた俺の手が、ソツとその描かれている文字にフツと触れた。

すると、そんな現実はないと思っていたその現実が着たかのように、その本は光出してだんだんと引きずられていくような気がしてきた……。

望み

「いつてえ……」

何でかは解らないが、凄く力強い光に覆われ、そのまま反射的に瞼を閉じて数分後。意識は漸く段々と取り戻せるようになってきたが、凄く体のあちらこちらが痛い気がするのだ。

もし、例えろというのならば、子供の気分で少し高めの木に這い登り、失敗してそのまま背中を地面に押し倒されてしまったときのような感じた。

ということ、凄く背中が痛いと目を開けたとき。俺は、素直にその場の雰囲気を読み取れず、ジツとかたまり、痛いことを忘れてしまった。

周りは真っ白で、周りには、丁度良い木と木の間のある林に入っただ。そして、そこに本当に落ちたかのように、仰向けに倒れていた。

上体だけを起こし、周りを本当にきちんと見回すと、本当に林の中に入ってしまったている感じた。だが、少しも林と烏カラスという不気味な何かの印象は無く、逆に周りが白すぎて不気味という印象がある。林に隠れながらも、少し遠めに色とりどりではない、まだ塗り絵をしては居ない城みたいなものが建っていた。といっても、木の上や、木の隙間から出ている部分でしか感じ取れないのだが、確かにあれは城みたいな感じだった。

それ以外に見るのならば、特に人が歩いているわけでもないし、後ろを向いても特にこれといって、真っ白で黒く塗りつぶされたような木が立ちはだかっているという不気味以外は、異常は無い感じだった。

今頼りになるのは、あの城だけ。ということになる。

——俺……疲れてるのかな?? 凄いふかい夢だな……

こんな夢があるわけがないような気もするが、夢というのは人にはわからないもので、どんなものでも作り上げてしまうものだろうなと、勝手に判断を下し、「夢だし」という少しの安心感を、勝手に作りあげ、その城に足を進めて行った。

もしこれが本当に夢じゃなかったとしても、現実逃避にはさすがにやりすぎだろうと思って、きつと何かの衝撃で頭が行かれてしまったのだろう。多分これしか思わないのだろう。

そう思ってしまうのはなんだろうか。

そんなことを、地道にいろいろ考えながらも、思考方向が変わっていつてしまったとき、いつの間にか憑いていたその豪邸様のお家の前に立っていた。そんなにも近いものだったのかとは、あえて考えずに、ゆっくりと顔を上げて見回した。

——でけ……さすが豪邸。

豪邸というのは、実際どんなことを言うのかもわからずに、勝手に豪邸と名づけ、どうにかして入る方法はないものかと思い、その豪邸の今立ちはだかっている門に手を触れた。すると、触れただけなのに、その勢いでキーツと音を鳴らしながらゆっくりと少しだけ開いた。

オイオイと思いながらも、ゆっくりと押すと、そのままの勢いで、ゆっくりと開いていく。

中に居る人にばれたらどうなるのだろうか。なんて考えながらも、門をきちんと閉めて、前へ前へと進んでいった。

——どうしてこんなに悠々と歩けるんだろう……。

普通ならば、周りを見回して、何がどうなっているのかと慌てふためいてしまうのに、こんなにも安心して落ち着いていられる自分が、少しばかり怖い。そんなことを思ってしまう自分。それはいけないことなのだろうか。

周りを見回すと、綺麗に整えられた庭。

玄関という大きな建物に入れる第二歩めに入るまでの道のりが、少しばかり長いのだとは思いながらも、ゆっくりと足を進めていた。

さすが豪邸というのだろうか。庭自体がこんなにも大きいと、きつとあの豪邸の中も、ありえないくらい大きくて、ありえないくらい道に迷いそうになるのだろう。そんなの入らなくても目に見えてしまつて、逆にその所為で入る気が失せる。

今のところ、とやかく言われているわけでもないし、寧ろ庭にも人が居なくて、こんな豪邸が大丈夫なのだろうかとか、他人の話しのはずなのに、凄く不安になってしまふ。もしここが税金取りの頭の行かれたやつらだったなら、俺がすべて根から綺麗に直してやるのかとも思つてしまつたり。

だが、今そうと決まつたわけでは無いからこそ、少し憎つたらしくも感じてくる。

——けどカントリーオブエクスペディションレスってどういう意味？
いまだに解らないその本だって、実際こつちには持つてこれなかった。きちんと握つていることは覚えてるのに、どうして今になつてその大事なモノが無いことに気づいたのか。そして、その英語の意味を調べてくるくらい余裕さえつかめればよかったなんて、今更そんな無意味なことすら考える余裕は、今にある。

もう少し、ハラハラドキドキして、今からさあ探検！！なんてことは思いつかない。というか、考える余裕が逆に無いのかもしれない。余り今を見ないで、できるだけ「アアしておけばよかった」とか「こうしておけばよかった」と後悔していたほうが、少しだけ気が楽になるような錯覚を覚える。

「……面白くなりそうだ……」

心の奥底から、どうしてかそう思ってしまった。誰かによつて乗り移られてしまったかのように、凄く身体のどこかこつかが重かつた。

背中が痛かつたあれとは少しちがく、何か人が乗つたように重かつた。

ピタリと足を止めると、そこには大きな豪邸へのもう一つの扉があった。

――漸く中か……

長かった足取りだったのに、後ろに振り向けば、そんなにも長くないよう距離だ。そんなにも考え込んでいるつもりは無かったのに。もう待っていられないと、ゆっくりとその扉に手を触れ、ドアノブを回すとゆっくりと開いていった。

「失礼します」

礼儀としての一言を言うなり、俺はゆっくりと足を勧めていった。日本では無いのか、靴を脱ぐ場所もなければ、家政婦さんたちは無言であり無表情で、黙々と掃除を行っていた。しかも外靴だと思われるから、軽くその場で靴についた汚れを取るように、とんとんとつま先を床を蹴るようにして、そのまま中に入っていく。

「あの」

話をかけようと、そのお手伝いさんだと思われる人の肩を触れると、手を止めて礼儀正しく俺のほうを向いてきた。

「なんでしょうか？」

「なんかわかんないけど急にこっちに来てここのこと良く解らないんだ。ここはどこなの？」

「Country of expressionless です」

何の感情も無く、スラスラとその英語みたいな言葉を、綺麗に発音して教えてくれたが、その意味を教えてほしかったりもした。少し首を傾げてみても、特に何も言ってはくれないが、再び掃除を始めようとは思ってはいないようだった。

じっと見つめていると、なにか？ときかれた。

「それってどういういみなの？」

「意味はありません」

「は？」

「……」

余り余計な事を言わないようにしているのか、全く無表情でそう

言ってくる。真っ白な建物を、綺麗に片付けようとしている。

掃除に戻ってしまう前に、聞きたいことを聞いて、この先どうすればいいのか悩んでくれなければ困るのだ。

「まあいいや。で。おれ一番に目に付いたここに来ちゃったんだけど迷惑かな？」

「……あちらのひとですか。コチラへどうぞ」

掃除の道具を床に綺麗に置き、誘導するように少し前を歩くこの女の人の後ろを、少し怖がりながらも近づいていった。

一つ一つの扉とのあいだが、やたらと長い気がする。ということは、長々しくこの部屋は絶対に広い。必要以上に広いと解る。

暫く直線だつたり曲がつたり、いろいろと進んでいくと、本当に大きな扉が目の前にドンと広がられていた。

その扉の前に立つなり、俺のほうに向き直り、ゆっくりと礼をしてどうぞと扉の方に腕を広げ、ご自分でといわれた。

ゴクリと喉を鳴らし、ゆっくりと扉に手を触れ、コンコンと軽く礼儀としてノックをした。すると、意外にも奥のほうからどうぞと少し嬉しそうな声が聞こえてきた。

失礼しますと少し大きめの声で言つて、ゆっくりと扉を開けると、この屋敷の半分を使い尽くしているんじゃないかと思うくらい、広くて大きい社長室みたいな部屋だった。

特に大きな何かを置いているわけでもなく、大きくゆつたりとした机と、すわり心地の良さそうな椅子があつて、その大きな椅子にのんびりと座つて俺のほうを見据えている、男性だ。

「どうぞ」という声は、この男性の声だろう。

軽く息を吐いた。

「失礼します……」

「こちらへどうぞ？」

微笑む事もせずに、軽くその机越しの前を指差された。ため息を

漏らさずように、ゆつくりと深呼吸しながらも足を進めた。

「君は……どこから来たの？」

「どこから……？わからない……です」

「名前は？」

「あつ済みません。まだ言っでませんでしたね失礼しました。一之瀬粒いちのせ じゅうです」

できるだけ礼儀正しく、少しの微笑みも無くそう言ってみた。

確かにコチラから失礼したくせに、名前をまだ一度も言っていない。さすがにそれは失礼だと思ったのだが、なんだか無表情のこいつがむかついてくる。

「そう。リュウ君ね。日本から？」

「え？あつはい」

日本語もしゃべってるし、それが普通なのだろうと思いながらも首を傾げると、俺の考えていることがわかったのか、チラリとこちを見てきた。

そういえばと思い出したように手を動かして、机の端にあるプリントの山の一番上から、一枚ペラリとめくり、机にバシッと置いてこっちに向け、ペンを置いた。

カチャツと先に親を出してくれてそのままペンを渡してくる。

「これに必要事項書いてもらえないかな？」

口調からして、少し接待に離れているのかなれて居ないのか。どちらかという、接待に少しでもなれているような気がする。

大人しくペンを左手でもち、軽くペンを回して紙を見つめた。

「左利き？」

「えっ？あつはい」

そう。珍しく俺は左利き。珍しいのかどうかも解らないが、どうしてか滅多に左利きは居ないような空気がある。

紙の必要事項は、名前。元住所。元というのはなんだろうか。ヤッパリ日本の話のことだろうか。名前は一之瀬粒。小さい頃はここの名前で馬鹿にされてしまったことがあった。「粒つぶのように小さな

バカ」その頃が一番初めに、感情なんかなくなってしまうばいいの
にと思ったのは。

言われたときは「死ね」と思いつきり怒鳴った。その後後悔し
た。

結局死ねといっってしまったて死んでしまったら、俺が犯罪者になる
んじゃないかと。もしこれが本気で言ってしまったのなら、心の
傷となってしまうんじゃないか。いろいろとそんなことを永遠に考
えてしまった所為で、いろいろと億劫になってしまい、一時期考え
るという事を捨てた。

それからというものの結構つらい事に気づいて泣き出した。それ
から俺の人生が始まったようなものだった。

「もう泣かない」と。
「手が止まってるぞ？」

ハッとしてみると、名前の「一之」までしか書かれていない紙。
少し深呼吸をして「瀬」までを一気に書いた。けれど、ヤッパリ
名前を書くのは嫌いだ。特に下の名前の「粒」。どうせ何かまた言
われそうで怖かったが、震えながらも一生懸命書いてみた。

上にフリガナを書かなければならなく、そこはスラスラとかけた。
住所も、何の躊躇もなくすらすらと書けた自分が、少しばかり怖
い。

次の項目。

どうしてここの世界に来てしまったのか。

——どうしてって……どこからどこまでのことを書けば良いのだろう
『図書室で適当に引つ張った本の名前を読んだとき。本が光ってい
つの間にかこっちに引き込まれてました』

結構短縮したが、まだまだ長い気はする。けれど、これ以上短く
すると、全く持ってわからないものになってしまうため、これで解
って欲しいと願いながら、ゆっくりと次の項目にめを引きずる。

生年月日。

一月十一日。

血液型。

O 型。

年齢。

——どうしてこうも質問事項が不順なんだ……

年齢は16歳。ピチピチの高校一年生。そしてもう少しで高校二年生。に慣れると思っていた。別にそんなに悪いことをしているわけでもないし、成績が危ないというわけでも、単位が危ないということでもないと思う。

けれど、少しだけ友情関係なども入れてしまうと危うくなってしまふ。そんなことを少し気にしながらも、今は生きてしまっている自分が少し怖い。

感情がなくなればいいと思ったのは誰だっただろうか。自分だったはずなのに。

結局自分の言いように、自分の思考は動いていくからこそ、バカだなともおもってしまう。自分で思っていた以上に、周りの空気にやられてしまうタイプなのかもしれない。

次の項目。

自分が出来る事柄。

項目も無しに、自分で書かなければならないのだろう。けれど、自分がこれといってできることなんて、全くといっていいほど無い。ただ平凡と暮らすだけ。

本当にそう書いてやった『平凡に暮らす事』。

それですべてだった。

ゆっくりとペンを紙の上に置き、向きをその人に向けてみる。解ったのか、素直にその紙を受け取り、ゆっくりと目線を下にずらしていていた。

きちんと見てくれている。とおもうが、ただ見通して空項目が無いか見ているだけかもしれない。けれど、そんなに長く書いた分なんてないし。けれど、全部見たのか、最後の方少しだけクスツと笑ったような気がした。

けれど、きちんとその男性を見たが、笑った様子は全く無かった。無表情で、何も考えたくないですって顔をしている。

「最後の……」

「え？」

「平凡に暮らすって……自分の能力とかは？」

「ないです。特にこれといって何か出来たためしないし。相談されて結構有名だつて言われたけど、軽く聞き流して適当に相槌打って、その場にあつた言葉を出したただけなんだけど……」

「へえ相談受けね」

「えっ！？でもそんな上手くは乗れないですよ?!」

「……お前はいちいち反応がでかいな……一つ言っておく。ここでは俺以外の前で余り表情をあらわにしないほうがいい」

「あなた以外の人と？」

「ああ。ここの人たちは感情も無くてその所為で表情もあらわにしない。もって居ないのかもしれない。いや。それは俺が望んだことかもしれない」

望んでできる世界？

人間そんなことが出来てしまうのだろうか。それともこれは、本当にゆめだったりもするのだろうか。それだったら少しでもわかる気がする。

感情なんか消え去ればいいと思ったとき、夢の世界でもいいかもしれないと、心のどこかで願っていたかもしれない。

「望んだ？」

「ここは俺の世界だ」

「……え」

サイズ

確かにさっきの人は言った。

ここは俺の世界だと。想像の世界だとそのあとに繋げた。その言葉こそがわからなかった。

その後、俺はお手伝いの人だと思われる人に連れられて、綺麗な部屋にご招待されてしまった。といっても、「これからの粒さん自身の部屋です。ご自由にお使いください。何かあったら近くの使用人までよろしく願います」と言われたまま出て行かれて、規則とか、何をすればいいのかとか、全く持ってわからなかった。

なのに、そんな状況で方っておかれてどうなるのだと、思いつきり訴えてやりたい気持ちはあるのに、どうしても、何かが足りない気がしていた。

部屋の中は真っ白で、基本的に必要な家具はある。来る事がわかっていたのか、ただ綺麗にするのが好きだからなのか、なんなのかはわからないが、きちんとベッドもあった。シーツも綺麗で、シワの一つも無い。

洗い立てかどうかは解らないが、汚くは無いいと言い切れる。けれど、俺は着替えたい。けれど、替えなんてないし。

そんなことを言いながら、真っ白なクローゼットを何気なくあけると、ずらりとハンガーにかけられた真っ白な服。

自由に使えるといわれたら、これも使つていいものなのだろうかと思ひ、ゆっくりと一つの服に手をつけた。

ざっと見たところ、全部同じ服に見える。

服装的には、凄く教会でのお偉いさんに感じる。凄く上の背広が長くて綺麗に整っている。大体膝裏あたりまでであるのに、前のほうは膝上辺り。着心地良くて、スッキリしていそうだが、実際こういう服穿きなれていない。暫くの間は、着ていた服を着ていようと思

ったときだった。急に部屋のどこから、電話の呼び出し音が鳴り響いてきた。

反射的に肩をビクつかせ、服をつかんだまま固まった。

鳴り響く方向を探そうと、恐る恐る振り向くが、どこにあるのがパツと見ただけではわからなかった。

服をクローゼットに戻し、鳴り響く元へと足を勧めると、ベッドの隣にあるシンプルな棚の上に、電話の子機がおかれてあった。ゆつくりと手を伸ばし、通話ボタンを押した。

「……はい」

『一之瀬か？』

電話の向こうは、先ほどの男性だった。ここの主人見たいなのだが、どうして電話をよこしてきたのだろうか。ヤッパリ何かと説明とかがあるのかと、少し期待していたが、その期待にこたえてくれなかった。

「はい」

『部屋には着いたみたいだな。クローゼットに服がある。ここにいらるときはその服を着るんだ。洗濯はクローゼットの隣にあるカゴに突っ込んで夜にでも廊下に出しておけば、勝手にお手伝いさんが洗濯してくれる。一之瀬の専属お手伝いはそこに連れて行ってくれたやつな』

専属なんかいるのだ。

もしかしたら、その人たち、本当は存在するのではなく、この男性の想像上のものだったりしたら……。

「はい」

『後は自由に過ごせ。何か質問は？』

「あの……この屋敷の事なんです。どうして白ばかりなんですかな？」

『落ち着くからだ。他は？』

「この世界があなたたの想像上のものだといっていましたけど……どうということなんですか？」

『それは後々ゆっくりと順を追って話して行こう。ここにたどり着いたのは一之瀬。お前だけだからな。焦らなくてもいいだろう』

「……ありがとうございます」

ここにたどり着いたのが俺だけ。ということは、ほとんどの人はあの本に触れては居ないのだろうか。けれど、図書の係りの人でも、整理をする時に触れているはずだ。

それに、違う出入り口があってもおかしくは無いような気はしてくる。

考えながらも、先ほどのクローゼットに足を進めて行っただ。

少しこの服を着るのは勇気がいる。凄くコスプレみたいだし、何かの漫画でこんなのがあってもおかしくは無い。ネックレスみたいなもので十字架をつけ、胸の辺りにぶら下げていそうな服だから。

——呪われそー……

少しだけ苦い顔をしてしまう。

上着を脱ぎ、サツサといわれたとおり、服を着替えた。

「なんでサイズが合ってるんだよ……」

サイズを教えた事もないし、あわせたようなこともしたことがないくせに、知っているというのも結構驚きものだった。

ただでさえわかんないやつなのに、余計にわからなくなってくる。それに、どうしてか焦る心がいつの間にか消えている。わけもわからない状況に陥っているのに、どうしてここにいるんだとか、どうして夢が覚めないんだとか。

「……夢……だよな？」

夢としか言いようが無いこの世界に、俺はただ一人連れてこられた。

気づいた事

「あの……名前はなんていうんですか？あの人……」

部屋を出て、適当にメイドを探していたとき、丁度先ほど案内してくれた人がコチラに歩いて着てくれている。

これ以上うつろについては、逆にここに迷い込んでしまいそうになる。どうせ夢だからと、少しばかり諦めかけていた。

本当に夢みたいな世界なのだ。

俺が居ないかのように、ただ黙々とこの屋敷を掃除している女の人たち。逆に声をかけにくくて、焦った。

「ご主人様です」

「えっと……名前」

「わかりません。私たちはご主人様とお呼びしております」
話しにならない。

会ったばかりの俺が、あの人のことを「ご主人様」だなんて呼べなかった。呼びたくもない。軽く心の中で、重いため息を落とすが、この人に当たっても仕方のないことだった。

一番悪いのは、好奇心で開いたあの過去の俺が悪かった。何かの機会で、きっと目を覚ますだろう。

何気なく俺はそう思うしかなかった。

何もすることもないし、何をすれとも言われて居ない。実際に言う、呆れたため息と共に、自分の部屋にすら戻れない。つまり道に迷ってしまった。

——俺……どうすれば良いの？

こんなにも暇が出たことなんて、休日という天国しかなかった。といっても、結局休日は休むことで精一杯なのだが、今は休むというよりも、疲れていることもないし、休める身体なんてなかった。こんなところでオロオロしていても、逆にこの家政婦さんたちに

邪魔になると、出来るだけ広めのところに行く。

コツコツと、歩く靴の音が、この広い屋敷の中に響き渡っていく。

「……静かだな」

ついつい思っていることが、ボソツと口に出てしまった。なんだか、逆に一人というのも寂しいものなのだ。

元々独り言は無いはずなのに、ぼそりと今、思っていることがすべてを出してしまいそうな雰囲気、このホール。

歩かない限り静かで、音の余韻はかなり響くものだった。

——気の所為……だよな？

今フツと、とつても不思議な事が感じられた。その鍵は、多分、ここにいる家政婦高メイドだと言う人の行動で。

周りをキョロキョロ不審に見回しても、スツと静かに耳を澄ましきつていても、その疑問は高まるばかりだ。なぜだろうという五文字の疑問が、頭の中にグルグルグル回っては、強くなっている。

——なんで？

考えるのはやめて、終に首を横にかしげる。

いくら耳を済ませて、静かで自分の鼓動の音しか聞こえない。

——そういえば……どうして……どうしてもっと早くに気付かなかったんだ！！

記憶を巡らせても、初めてこの中に入ったときも、メイド？家政婦？に会って、一緒に歩いていても、どうして疑問に思わなかったのか。今はその疑問に襲われる。

あの時は確かに、自分の音しか聞こえていなかった。今思ってみれば、この建物は指だけで数え切れないんじゃないかってくらいの、数多い不思議な事ばかりだった。

それに今更気付いた自分も自分だが、周りのメイドたちも、全く気付かない雰囲気というのもどうかと思う。たしか、ここはあの人の想像上のものであって、元々存在しないからこそ夢。夢だからこ

そ、確かになくてもおかしくは無い。実際夢というのは、「俺自身」「粒自身」の行動が出来るはずなのに。

確かに自分のこの足で歩いているし。

今、一番疑問に思う点。

「どうして足音……ないの？」

メイドがいくら近くで歩いていても、俺が歩かないかぎり、少しの足音も聞こえないのだ。そんな修行を積んでいても思えない。

とても静かなのは、きっとそれが関係しているんじゃないかとも思えてしまう。

これは夢だから。

そう心の中で唱えても、凄くリアルで、凄く現実っぽいこの世界を、どう夢だと感じれば良いのだろうか。先ほどまでは、ずっと夢で通っていたのに、だんだんでくるリアル感で、凄く夢からは通り抜けて、ドリームの世界と入ってしまった気分だ。結局ドリームも“夢”という意味ならば、ここは“二次元”。いや。別に二でも三でも五でもいいから、“次元”という言葉が入るに違いない。

逆にそう考えた方が、自由気ままに生活できるような気もするのだが、こんな貴重の体験を、こんなアヤフヤな気分で味わって良いのだろうか。

グウウウウツ……

悩みに悩んでいる本体である俺を差し置いて、お腹と言う俺の一部は、暇ということを音で表してきやがった。

表されても、どこでどうやってご飯を食べればいいのかも解らない。

「おなかすいた」

その場に、子供みたいにおなかを抱えてしゃがみこむ。

ここでメイドが気づくのが、わが地球。

周りを見回しても、こんな俺の行動を目に取るメイドなんて、誰

一人としていやしなかった。

壁を見ても“食堂”だとか、何とかの間とか言う名前のものなんて、一つたりとも無かった。

よく店内で見つける、トイレのマークや、エレベーターのマーク。エスカレーターのマークが書かれている小さな看板が、天井辺りからぶら下がっている様子は無い。

しかも、上を見ると、ありえないほど天井が高かった。と思ったとき、ふと新たな事が発見してしまった。

「ここ……このホールを中心になってるんだ」

上を見ると、ここを囲うように、二・三階の廊下が、四角くあって、そこから枝分かれするように、部屋へと進むだろう廊下が伸びていた。

しかも、埃一つないかのように、天井から垂れているシャンドリアが、凄くきれいに、悠々と輝きだしていた。その下にいる自分が、凄く夢みたいだった。いや。夢なのかもしれないのだが。

一度でもいいから、こんな屋敷に住んでみたい。だなんて思ったことはあっただろうか。多分、過去を思い巡らせても、そんな事は思わなかっただろうに。そんなことを考えながらも、できれば“食堂”みたいな場所があればいいな。だなんて考えながら、重い足取りを進めていた。

お食事

漸く着いたと思った時には、もうすでに腹と背中がピッタリくつくほど空腹に襲われていた時だった。どうしてここまで空腹に襲われなければならないのだろうかとも思いながらも、ここにたどり着くまでに、唯一白黒のトイレマークの看板を見つけただけだった。そんなものがあるのならば、食堂。だとか、その他諸々の物がある。でもおかしくは無いと思う。真っ白な壁と、綺麗に清掃されている床。それを俺が穢しているのかもと思っただけで、少しばかりいい気味。なんて思ってしまうのはどうしてだろうか。どこかに汚い感情があるから？

といっても、ここに着てから何かを考えることしか出来ないから、仕方がないと思う。

もしここに二人できていたら、相談しながらもどうにかできるんじゃないかと思うけど、ここには俺一人しか居ないようなものを感じてくる。

特にこの足音が。

今までは、相談される方だったが、ここに来てから相談したい人の気持ち、はつきり綺麗には言わないが、だんだん薄っすらとわかってくるようになってくる。

ここが食堂だとわかったのは、ただ単に真っ白な布が、細長いテーブルに二つの椅子。しかも、それは端と端で向かい合うように置かれていた。それで尚且つそのテーブルには、白い布のようなものが綺麗にかけられている。

椅子も白。

何か食べ物を落としただけでも黄ばんでしまうんじゃないか心配しながらも、近くに居るメイドにおなか減ったと。ただそれだけの、そのメイドは軽く礼をしながらも、ドアと向かい合うように、大分億のほうにある白いカーテンの奥に消えてしまった。

この部屋自体が細長い。

入ってきたドアに近い方の椅子に座って、向こう側を見つめるが、そこには向かい合うように遠くにある椅子と、真っ白な景色の外。つまり窓がチョコチョコとだけある感じだ。そして、左隅の方に人の出入りが出来るような場所を、てきとくにカーテンで隠すようにある。

そこに隠れて言ったと思ったメイドが、静かに出てくるなり、たくさんのメイドが出てきて、たくさん料理をテーブルの上いっぱいにおいていく。

とても置き方は綺麗なのだが、奥のほうにまで置かれると、ゴム人間ではないのだから、届くわけが無いというくらいの遠さにまでおかれる。

食べたいとは思わないが、どれから食べれば良いのだろうかとは迷う。

首からぶら下げるような白い布を渡され、大人しくそれについている紐で首に巻く。これはこぼしても服を汚さないようにしているのだろうかとも思う。確かにこの服自体も凄く白くて、少しのこみでも目立ちそうだ。

目の前に置かれた柔らかくておいしそうな垂れのかかった、ステークの皿の右側にナイフが何本か。左側にフォークが何本かおかれていた。

これはなんとなく解る。

利き手でナイフを使い、逆の手でフォークを使うはず。

しかし、準備してくれた人には悪いのだが、俺の利き手は左であり、右ではないことから、普通の人とは全く逆だった。少しばかり困りながらも、一つ一つフォークとナイフを交換するように換えて

いった。

たくさん並べられたフォークたち。常識で、外側から使うのか、内側から使うのか。というものがあるのだが、実際のところ忘れた。なんとかを呼ぶ男という漫画を読んで、「へえ〜そうなんだあ〜」と何回か納得したことがあったような気がする。その話を最初から最後まで又ンヌン唸りながらも思い出すと、それによれば、確か外側から使うはずだ。

カチャっという音を鳴らしながらも、ゆっくりと恐々左にナイフ。右手にフォークを持った。それぞれの背に人差指を伸ばすように力を入れながらも、「ハ」の形にしながら、ゴリゴリとステーキを斬る。

ゴリゴリと言っても、実際のところ、本当に斬っているのかもわからないくらい柔らかくて、フォークで抑えるのは良いが、ゆっくりと離れた時、フォークで多少切れた肉を見ると、かなり高級に感じてくる。

フォークで持ち上げ、ゆっくりとそれを口に含めるなり、優しく噛むように歯を当てただけで、ジーンワリと口の中に広がっていく甘み。一瞬、天国に行った様な気分になれる。それに、こんな肉は、多分生まれて初めて食べた肉だ。

少し嬉しくなって、続けて、肉を切つてはフォークで口の中を含める。その度に微笑んでしまう口許を隠す事もできずに、フォークを優しく銜えてしまう。

ゆっくりとフォークを皿にカチャリと鳴らすなり、急に後ろから手が伸びてきて、汚さないように掛けていたナプキンで後ろから優しく口許を拭いてくれる。

急な出来事で、フォークもナイフも、手に持ってはいるのだが、皿におくようにしたままピタリと止まった。

ゆっくり振り向くと、そこには皆が言う「ご主人様」のお出ましだった。微笑む事も無く、真顔でゆっくりと手を引いていく。

「あっ……ありがとうございます……えっと……」

「構わん食事を続けたまえ」

そういいながらも足をすすめ、何メートルかあるテーブルの側面を歩きながらも、ダイブ迎えにある椅子に座る。

そこに座るのは、「ご主人様」のためのものだったのだろう。もしそれが間違えて、俺が今座っているところが「ご主人様」の席だとしたら、とても失礼なことをしているのではないのだろうか。

でも、何も言わずにメイドが椅子を引き、その椅子に座る「ご主人様」を見ると、なんだかどうでもよくなる。

「あつあの！」

「なんだ？」

話をかけるなり、食事に目を通していた「ご主人様」の視線が上がり、俺のほうをジッと見つめる。

「えつと僕は貴方のことをなんと呼びすればよろしいのですか？」

一応目上の人ということで、戸惑いながらも敬語で聞く。

「その服……サイズはどうだ？」

「あつピッタリでいい感じです」

「そうか」

そういうなり、ナプキンを首に巻き、フォークとナイフを手に持って「ご主人様」は食事を始めた。

大人しく俺も再び食事を進めるが、ピッタリと固まり再び「ご主人様」の方を見る。

話を変な方向に変えられた。

確かにこの服は、変にピッタリで、どうしてここまでサイズがばれているのか。ただの運とか、勘とかそんな感じであれば、このフォークの置き方も勘で左利きとわかってほしかった。

「ご主人様」は俺が左利きだという事を、忘れていなければ知っているはずだし。

「あつあの話を変えないでくださいよ……」

「私のことは自由に呼んで構わん」

「えつでわよければ名前を……」

「……氷上恢夢だ。氷の上で“氷上”恢夢のかいは“りっしんべん”に灰で恢。むは“夢”と書いて夢」
「ひょうじょう……かいむさん……」

「氷上恢夢」少し換えれば「表情皆無」だ。

本当は、俺が生まれた「日本」というか、「地球」で産まれたのか。もしこの人も、俺の生まれたところとは違うところで生まれたのならば、少しばかり興味があるような気がする。

どうして皆がみんな「表情」がないのか。

気になりどころだ。

「じゃあ……恢さんとお呼びしてもよろしいですか??」

につこり微笑んで、愛想をふる。が、無表情でステーキを斬りながら構わんという。

できるだけわかりやすく、簡単な名前。それで尚且つ崩した言い方で言いたかった。ここで少しでも驚いてくれたり、クスツとでも笑ってくれたりを少しばかり期待していたが、驚くどころか、本当にどうでもいいというような返事が返ってきて、少々ムツとしてしまう。

ここまで頑固な人も居ないのではないのだろうか。

もしかして、恢さん自身、表情が表に出にくい体質なのか、メイドと同じような感じなのだろうか。

メイドが「ご主人様」と呼ぶのならば、皆が皆というのは難しそうだ、できるだけ「恢さん」を愛称とさせてやりたい。というよりも、「恢さん」というニツクネームにしたのは、漢字変換をすれば基本的に「解散」とでるからだ。

こんな無表情な場所から、皆が皆解散して行って欲しかった。

そんな願いのこめられた名前を。無駄な事かもしれないが、少しでもここを変えたいくなる。一度ここに来る前に感じた、表情なんかなければいいのに。とか、感情なんか消えてしまえばいいのに。

そんなのもう思わないと思う。

表情が無ければ、相手がどんな気持ちで何を言いたいのかわからない。

それから避けるために、無表情になったのならば、間違いだ。そんなことに今更気付いてここに居る。

できることならば、この屋敷自体に色を表情という色をつけてやりたいと燃える俺だった。

最終話：爪の痕

あれから数日間。

屋敷の中にはもうすでにほとんど慣れ、日常生活的に困るようなものは、唯一つ。表情という名の敵だった。

恢さんは恢さんと、たまに様子を見にとだけで部屋から出てくるが、それ以外でお風呂以外は見かけなかった。

会ったら会ったで、俺から積極的に話をするようにしていた。けれど、返ってくる言葉といえば「そうか」とか「ふん」とか。でもそれはまだいい方で、メイドたちなんかそんなことすらも言ってくれない。

質問をすれば返ってくるのだが、本当に素っ気のない人たちばかりだった。

そう生まれてきているのならば仕方がないとは思うのだが、もう少し何か足りないような気がしてきていた。

でも、一つ解った事があった。

足音。

それは、なるのは俺だけではなく、恢さんも音が鳴ること。つまり、恢さんはちゃんとした人間なのではないのだろうかと思う。つまり、人間であれば、調教しなおすという事も可能なのだ。

だから、できるだけ恢さんと離そうと考えた時、質問などはメイドではなく、恢さん自身に聞こうと作戦を練っていた。

ということで、今俺は、堂々と廊下のだ真ん中を歩きながらも、恢さんの部屋へと向っていた。

コンコン

重そうな大きな扉を、慣れた手つきでノックをする。

「どうぞ」

重そうな声で、どこかのスピーカーがなり、ゆっくりと扉が開けられる。

大きな机が、奥のほうにある。そのところで、地道に何かの書類と戦っている恢さんをいつもみるが、こんなにも人と接しないのに、何をする必要があるというのだろうか。

ここのお金を払っていたり？

さすがにそんなことはなさそうな気もするが、もしここがちゃんとした国なのならば、会ってもおかしくは無い。という事が気になってしまい、ついついここに来てしまったのも事実。

「今日はどうした？」

ここの常連さんになっている俺は、その机越しに立ち、にっこりと笑ってみる。いつもにっこり笑っていれば、なんとなくすつきりするようになってきた。

恢さんは、そんな俺をチラリと見て、ペンや書類を机の上においてきちんと座りなおしてくれる。

一応礼儀というものは知っているらしい。

「外行って来ても良いですか？」

「外？」

楽しげに言った言葉に、眉間にシワを寄せ、少しばかり濁ったような顔つきになる。

外はダメなのだろうかと不安になるが、言ってしまったものは仕方がないし、なんとなくここで引くのもいやだと言う何かのプライドが言う。

すると、真剣な瞳で再び椅子をきちんと座りなおしながらも、くると椅子を回して、何かの様子を見るように、外を見ていた。

「外。気分転換に！ ここの事もよく知りたいですし」

「……じゃあ誰かメイドを連れて行け」

少し渋った顔をしつつも、何故かメイドを連れて行けという。

くるりと向き直り、三度目の椅子の座りなおし。どうしてそんなに外に行くだけの為に、嚴重にならなければならないのか。

ただ一人で行くのもいいし、良ければ恢さんといきたいなあなんて思っていたのは、そこらへんは気付かれなかったのだろうか。

「なんでですか？」

ついついキョトンとしたような顔で聞いてしまう。

少し失礼だったかな？　と思いつつも、ジッと恢さんを見る。

少しばかり唸っているかのような様子を見せながらも、時間を置く。

「外は危険かもしれないぞ？」

「かもって……外に出たことないんですか？」

「……」

「……」

ならなぜ書類などがあるんですか？　と聞きたかったが、あえて

そこは『プライベート』と勝手に解釈し、ジッと黙って見せた。

スーッと視線をずらし、少し焦った様子を見てしまった俺は、にやりと笑って軽く机に手をつけて体重をかけ、じっと見つめる。

すると、くるりと背を向けるかのように椅子を回し、空を見上げながらこういった。

「空が青いな」

「……ないんですね？　外」

「……空が青いと思わんか？」

段々につこりと笑ってきた俺の口許が、自分でも押さえが聞かなくなるほど楽しい。

「それは天気が良い証拠ですよ？　外ないんですね？　なら一緒に散歩しに行きませんか？？」

「いや。私は書類が溜まってるから」

「人が来ないこんなところでどんな書類を整理しなければならないんです？　あつたとしても、たまには新鮮な空気を吸わなきゃダメですよ！！」

軽くポンポンっと机を叩きながらもそういうが、全く耳に入って

いるのかも解らずに、半分諦め状態になっていた。

仕方がないと、肩の力を抜き、軽くため息を付いていった。

「解りました。僕ひとりで行きますね……失礼しました」

踵を返して、そのままその部屋を出て言った。

外を知らないのならば、特にこれと言って案内も出来ないはずだ。という事になると、先に俺が外を知ってしまい、それで後で連れ出しながらも楽しむというのも、ひとつの楽しみかな？　なんて思っ
てしまい、あそこで妥協してよかったともだんだんおもえてくる。

半ばニヤリと微笑みながらも、一番初めに入ってきた玄関の扉を
せつせと開ける。

相変わらずカギが閉まっておらず、軽々とあけるが、多少重みがある。誰が来るといっわけでもないから、鍵をずつとしててもいい
のでは無いかとは思うのだが、誰も来ないからこそあけているのだ
ろうか。

それとも、俺みたいなのが来るから？

あけたところから見る空は、綺麗。よりも、まぶしくて暫く目を
開けられなかった。

人口的な明かりの下で生活していた所為か、自然の光は、比べよ
うのない明るさを見せ付けていた。

ゆっくりと瞼を開けるなり、雨を降った感じもない、乾いた地面。
真っ青で綺麗で、何処までも透き通っている空。

涼しくて、綺麗で新鮮な空気。すべてが気持ちよかった。

ドアを閉めて、最初は微妙な不安と、疑問ばかりで通ったもんまでの距離を、今回はスキップ交じりで走る。

あの時は聞こえなかった鳥の声。

靴の音。

すべてが幼稚に戻った気分で、何故か楽しかった。

カシャンと勢い欲手をかけた門がなることをいいことに、それにも何かの楽しみを覚えていた。

グイッと自分のほうに引っ張りながらその門を開け、完璧な外に出た。

ジャリつとなる少しの砂とコンクリート。そこを駆け抜ける速さで走り出す俺。

そんなに走るのが好きというわけではないのだが、凄く久々に感じる外は気持ち良すぎている。

肺に入る酸素。

冷たくて、それで尚且つ気持ち良かった。

木に囲まれたこの屋敷。真っ白な屋敷の天辺当たりにある、三角の何かの象徴を見ようと、右足を軸にして後ろに振り向いた時、一瞬何かの幻覚が見えたような気がする。

屋敷全体が、虹色の何かに包まれるように、キラキラしたものが回りに輝いてみた。

全体を囲むように。

虹色は、だんだんと屋敷のほうに近づいていき、だんだん屋敷を虹色に染めていく。

流れる海を見た気分だった。

揺れていて、色が流れている。

だんだんその虹色が消えていくかと思うと、スツと真っ白だった屋敷が、少しばかり本当に薄い水色が写ったような気がする。

白いといわれれば白いが、その前の白を見ている人に言わせて貰えば、何かに染まった気がする感じた。

色をつけたい。

いつだったかにそんなことを、心に決めたことがあった気がする。いま、少し色がついたということは、これから何かできるんじゃないかという、勇気がだんだんわいてくる。

恢さんが少しずつ変わってくれるかのような、何かの期待と自信がこみ上げてきて、いつのまにか啞然としていた顔が、キリツとするような瞳に変わっていた。

握った拳を開くと、そこには爪の痕が残されていた。

最終話：爪の痕（後書き）

短く、スッキリしたような終わりではありませんが、都合上、一旦これで終わりにしたいと思います。

読んでくださった方々ありがとうございます！

もし次連載などがあれば、そのさい、よければ読んで下さったと思います。

ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4673b/>

Country of expressionless ~ 無表情の国 ~

2010年10月8日13時53分発行